

食べものの言葉

リョウベツクワン
梁秉鈞

四方田犬彦訳

魚パツク

「中国原産の魚が
アメリカの湖に氾濫し
住民にパニックを引き起こしている
官房長官が火曜日に声明を発表した
この手の殺傷力をもつ魚は
徹底的に輸入禁止すべきであると

「あな恐ろしや、この余所者は

硬い顎と歯で何でも食べる

見た目も無気味だ

ホラー映画の半魚人みたいだ

アメリカ中の湖を食い散らしたら どうしよう

アメリカ中を食い散らしたら どうしよう

「あな恐ろしや、この怪物は

水中のものを食べ尽くすと

鱗ひれを使って陸地に上る

思うだけでも身の毛がよだつ

アメリカの家を食べないと なぜいえる

アメリカの車を食べないと なぜいえる

アメリカン・ライフは台なしだ

「あな恐ろしや、こいつは一体

敵が送ったスパイじゃないか

水面下の情報を操って

企業に偽の噂を流すんだ

マーケットに爆弾をしかけ
単純善良な市民を動揺させる
モラルを壊し 離婚を増やす
最後はみんな 邪教の神様を祠まりだすぞ

「あな恐ろしや、見ての通りよ
レジャー産業 丸つぶれ
漁業も深刻 死活問題
官房長官は輸入厳禁を宣告した
魚をもった旅行者は懲役6か月
入管は魚卵を徹底的に取り締められ
見つけしだい 撲滅だ

「メリーランドのお役人

科学者から絶滅法を伝授された
すべての湖に毒を撒くことすな
TVやスポーツウェアで広告して
すべての移民の靴底を検査しなさい

軍隊は休暇返上

核兵器だつて惜しんではなりませんぞ

「あな恐ろしや、なにはともあれ守るべきは

湖の清らかさ 国家の威信！

われわれの生活を脅かす者は嚴重に取り除くのだ

われわれの信仰に異端となるものも右に同じ

敵は民心攪乱の噂などお手のもの

敵は真正面から叩き潰せ

すべての敵に宣戦布告だ！

すべての魚に宣戦布告だ！」

ヴェトナム風カタツムリの生姜詰め

水田から拾いあげられ

殻から出され

刻まれ

干椎茸と赤味肉と玉葱と混ぜられ

塩をふられ

ニヨクマムと胡椒をかけられ

おまけに不思議な生姜のハーブを加えられ

もう一度

殻に戻され

いつそう美味しくなつたんだとよ

殻から出され

自分の地理と歴史から

切り離され

エクゾチックな色と

見慣れぬ香味を加えられ

価値を与えられ

高い値段をつけられ

それでもって投げ出されるのだ

まだ知ることもない

未来に

石頭鍋飯(ヒビンバ)

とにかくたくさんの野菜の

それぞれ持ち味をいかそう

揺れるトラジを調べにして

首飾りに仕立てあげよう

キユウリは半月に

胡麻油に濡れてもかまうものか

レタスは優しく揉みほぐし

ヴァイオリンの旋律を奏でさせる

椎茸は小舟となり

秋の葦の間を航^{わた}れ

モヤシは整列してフルートとなり

爽やかな夜明けの曲を演じよ

ビーツは心の秘密を語り

すべての者を赤く染めよ

誰もがスタイルをもち

沢山の野菜が

石盆のうえで熱せられ、混ぜられたわれらが米を

七色の歌に仕立てあげる

シンガポールの海南風チキンライス

鶏を蒸して

異郷にあつて故郷の新鮮な風味を作り
海を渡つてきた父と母を慰めるのに

一番いいレシピは何だろう

最高の醤油と薑茸で

食材と言葉のタブーを和解させ

新しい食卓の規則を作るのに

一番いいレシピは何だろう

米をチキンスープで適度な硬さに煮て

油を控え目に 新しい隣人をもてなし
街のさまざまな舌に合わせるのに
一番いいレシピは何だろう

ナシ・クミン

インド人は香料とカレーをもたらした
アラブ人のシシケバブがサテになった
オランダ人はナツメグとクミンを貪った
中国人は黒豆と野菜の種を背負って逃げた
醤油は遠くから来て やがて甘くなった
食卓の海岸線には無数の島々
誰も香料を植民地化はできない
タメリックがぼくの指を黄色く染め
パダンの葉はいつも強い香りがする

紅蓮なす唐辛子は何人にも頭を下げず

溶岩のように熱い

大海に聳える岩のようだ　ただ

米だけがぼくらの共通語

米だけが慰めの母

米はすべての色を包みこみ

胃につけられた古傷を癒してくれる

香港の大皿

焼米鴨と海老のフライは頂上であるべし

階級秩序は層ごとに明快をもってよしとする

だがポークチョップがしだいに

高い五味鶏と安い豚皮を転倒させる

敗残の宋軍が慌ててこの地に逃げ

漁師の貯蔵食糧を木の大皿から貪り食った
浜辺で車座になり 昔日の優雅は二度と戻らず
首都の栄光から遠く離れ 原地の野味を試みた

もう頂点には行けない 彼らは日に日に消耗していった
好き嫌いは別にして 卑賤の色に手を染めぬわけにはいかず
北の茸と南の烏賊の交流を妨げることもできない
関係の転倒はどちらをも汚し 頂上の純粹を乱す
肉汁の自然の滴りを止められる者はいない
底に敷いた蕪が すべて of 味を甘く吸いあげるまでだ

豚肉のディスケール

蓮根と豚骨のスープはだめだ

明日 豚肉がなかったらどうする

生豚業者がいうには

今日から不買運動で 仲買人を締め出すんだ

上水と荃湾の屠畜場を車で塞いで

スーパーの安い豚肉を阻止するんだ

仲買人がいうには

スーパーの値引きは一方的だ

うちは誰にも値引きなんか絶対しないんだから

民主党がいうには

食肉業界の独占状況に關しましては

慎重に考慮し 声明を申しあげます

新聞の社説がいうには

民主党の態度はチンプンカンプンだ
独占といえばすむわけじゃない
豚肉市場のありかたを見直すべきだ

街角のおばさんがいうには

みんな違うね 大企業はいげつない
今は普通の値段でも 後で高い
豚肉をつかまされるなんて まっぴらさ

屠畜場に向う豚がいうには

豚肉値引き戦争だって？

人間が勝手にいってる話だろ

俺たちには責任は何にもないよ

トムヤンクン

- 一番辛いのはトウガラシ
- 一番辛いのは真水
- 一番辛いのは彼女の口
- 一番辛いのはきみの塞がれた耳
- 一番辛いのは連中の発表
- 一番辛いのはきみたちの報道
- 一番辛いのは彼女の軀
- 一番辛いのは彼の眼差し
- 一番辛いのは連中の法律
- 一番辛いのはわれわれのタブー

一番辛いのは彼女の香り
一番辛いのはきみの大鼻

一番辛いのは彼の唇
一番辛いのは彼女の冷たさ

一番辛いのは彼の裸
一番辛いのは彼女の正装

一番辛いのは彼の眼差し
一番辛いのは彼女の気持ち

一番辛いのは彼女の笑渦えくぼ
一番辛いのはきみの不能

一番辛いのはきみの言葉
一番辛いのはきみの沈黙

家伝秘法のレシピ

ランタンに灯が点り廻り出す

いつも耳もとに落書きのないことが起きる

あなたも昔は辛辣だったけど

今は変わったわねと 誰かがいつてくれる

後であの料理は空蒸しするようになった

本来のテーマは 書いているうちに

少しずつわからなくなっていくた

曖昧で 脆弱で 妥協的なぼくは

最初に考えていた風には なかなかいかない

ありふれた調理法しかできない

喪ったメモをなんとか探さなくては

どこに行こうか ぼくらはいつも考えていた

子供のころ 放課後に寄り道した路地

植民地建築から漂ってくる匂い

ひどく遠い街から来て ぼくらの欲望を修復してくれるもの

ぼくらがいつも喪つてしまふ、慰めの抱擁

成長のなかで覚える 噛むにつれ広がる甘酸っぱい味

逃れようのない憂鬱のなかで

逃げ道は昏く 行く先も定かではない

歯の隙間に引つ掛かった永遠の秘密

祖母の魚餅は塩辛さと甘さが混じりあい

ふり分けることができない

上等の鱈ハカラウをまず準備する

豊潤なポルトガルのオリブオイル

後はすべて魔法のように運ぶはずではなかったか？

教母が日曜ごとに作ってくれた晩御飯

どこかの屋根裏部屋 どこかの南欧風の

窓にかけられたカーテンと日覆いの陰で

埃に塗れた昨日 微かに晃めくものは何？

姉妹は憶えている 友だちが繰り返し書き写した紙は

少しずつ色褪せていった

取り戻すことは難しい

巫女の神秘の儀礼にでも訴えないかぎり

フェンネルとナツメグの味は憶えている

ポルトガル風の海老ソースで煮た肉の特別の美味しさも

(祖母がせつせと作ったもの?)

いつまでも変わらぬ味が 祖母が死ぬと

もう誰にも再現できなくなった

一家の女たちは経文^{レシビ}の行方を争った

寝台の布団の隙間に隠されているのだろうか

虫に食われてしまったのだろうか 今はもう存在せず

微かに憶えているだけの 大人たちが見せてくれた

謎のノート ぼくらはあちこちに足を運び

鍋のなかを掻き混ぜては探すのだが

二度とあの豊潤な味に出会うことができないでいる

京漬物

我は六郎兵衛なり

そなたの純白の肌を愛す

みずから選びて

そなたを完成に導かん

そなたの葉を丸みに重ね

水にて洗い

指先を休みなく動かし 逃げいかんとする魂を撫で

枝葉に軽く触れるに至る

つねに異なれる格好を用いん

我はそなたの気付かぬ欲望を知れり

そなたの眉と眼が語るに

夢の中で軀中に塩を塗りこめられたいとか

そなたを固く縛り水に漬けん

我は知る そなたはひと夏を待てり

京で一番の美しき肌に育らんことを

そなたは芥子を擦りこまれた茄子

巻かれた山菜と桜桃

つとめて酸に満ちた大根

また辛い白菜

そなたは長く発酵した魂

抵抗をやめし西瓜

従順に横たわる椎茸

案ずるでない 我はまっただき心にて

そなたを拵げ乾かさん

そなたにまばらに浮かぶ傷を愛す

そなたには 夢にのみ可能な

悦びを与えん

重石で押し 紐で縛り

そなたからさらに余計な水分の感傷を吐き出させん

そなたの色を真実よりもさらに鮮明に保ち

透明な秋の夕暮に似たそなたの軀を

水色の皿に盛りつけん

湯豆腐

最初は白いテーブルクロスに

湯豆腐だけが出される

僕たちの対話の始まり

平面を想像して 現実を齎の目に切る

縦横四方、田形がなんとたくさん

考えてもみるよ 二人が素朴な農民だとか

出家した僧侶だとか

寺の夕食は汁と豆腐だけ

携帯電話もなければ

株も金勘定もない

ただ豆腐だけ

椎茸もモヤシもない

僕たちはまさに禅の境地に至ったみたいだ

俗世の煮物を食べず ただ豆腐だけ

でも豆腐を食べながらお喋りを始めると

豆腐のいろんな料理法が思い出されてくる

たとえば高野豆腐

牢獄にいとと面会人が差し入れてくれる高野豆腐には
こつそりと半合の酒が染みこませてあるんだぜ！

僕が前に食べたことがあるのは

薄緑色をした蟹味噌豆腐

きみがいうのはエビとドングリの豆腐

江戸時代には『豆腐百珍』という専門書もあったな

僕らはもうハム豆腐は食べた

エビと山根の豆腐

麻婆豆腐

臭豆腐

それぞれの味の話になる

いや まだ泥鰯豆腐があるんだな

熱湯のなかで逃場を失った泥鰯を

冷たい豆腐のなかに誘いこませる料理だ

僕らのグルメ欲は満足

ああ 阿弥陀仏

喋るほどに話が俗に落ちてゆく

僕らは心の平安が第一だといっているので

湯豆腐を食べるはずじゃなかったけ？

梁秉鈞について 四方田犬彦

ここに訳出したのは香港の詩人、梁秉鈞の連作詩『食物的語言』である。原文は北京官話で執筆されている。

梁秉鈞は別名を也斯^{イェス}といい、一九四九年に香港に生まれた。香港浸水大学を卒業後、カルフォルニア大学で比較文学の博士号を取得。現在は嶺南大学の教授として中国文学と比較文学科の教鞭をとっている。七〇年代にフランスのシモンヤソレルスといったヌーヴォロマンの翻訳者として出発した彼は、他にもビート・ジェネレーションやポブ・デュランの優れた理解者にして翻訳者であり、詩、小説、批評の三分野における旺盛な創作活動を通して、文字通り今日の香港文学を支えている文学者であるといえる。詩集に『雷鳴輿蟬音』『遊離的詩』『東西』などがあり、二〇〇〇年には選詩集『苦瓜をもった旅行』が刊行された。小説集としては『養龍人師門』『記憶的城市・虚構的城市』『プラハからの絵葉書』などがある。さらに文学はもとより都市論、映画、料理論と、広範囲の文化現象にわたって批評活動を展開し、『書興城市』『香港文化』『香港文化空間與文学』といった著作と、『香港的流行文化』『現代漢詩論集』『重読張愛玲』などの編著がある。日本については、大江健三郎、黒澤明、三島由紀夫、村上春樹についての論者があり、現在、四方田犬彦との往復書簡集の刊行が中央公論社とオックスフォード大学出版から予定されている。日本語で翻訳された作品としては、「すばる」一九九七年

七月号に『記憶の街・虚構の街』の部分と詩「除夜の盆菜」が、「ユリイカ」二〇〇〇年十月号に「食景詩」十編が掲載されている。

梁秉鈞の詩には食物や食事を主題としたものが少なくない。彼について卓抜な評論「消費の倫理」を執筆したレイ・チョウによれば、そのあり方は今日の中国語文学のなかでもきわめて独自のものであるとされる。梁秉鈞は、ポスト文化大革命世代の大陸の小説家のように、食べるという行為を飢えや暴力と連結させもしなければ、エイ・タン・ウェイ・ワンの『ジョイ・ラック・クラブ』のように、家族の感傷性の域に閉じ込められない。彼は食物など詩の素材にはならぬという傲慢な態度を拒むばかりではなく、「食物について深く考えることを通して、とりわけ香港というポストモダンでポスト植民地の時空における消費とは何かという問いが、新たに提示されるべき次元を開こうとしている」(Ray Chow, "An Ethics of Consumption", Forward to Leung Ping-Iwan Traveling with a Bitter Melon, Asis 2000 Limited, Hong Kong, 2002, p.11-12)

ここでは食物はただ食物であるばかりか、人間関係のための機会であり、思考のための食物、人間と事物との凡庸な関係の背後に隠されている、秘密の次元を探索するための手法なのである。梁秉鈞が食物に接近する手つきはきわめてユーモラスであり、優しく繊細である。だがその結果、浮き彫りにされてゆくのは、香港という巨大な大衆消費社会における消費の倫理であり、個々の食物が担い、また体現しているところの政治にほかな

らない。翻訳者は以前に作者の詩作品を香港のブレヒトと呼んだことがあったが、ここに訳出した九編を読み直して、ますますその感を強くした。個々の作品のいくつかについて、簡単な説明を添えておきたい。

「魚パニック」は、現実に中国産の魚がアメリカ合衆国の湖水で繁殖し、生態系を攪拌させているという、合衆国政府の発表を聞いたことが契機になって、執筆された。

「シンガポールの海南風チキンライス」は、シンガポールの国民料理への、偽りのオマージュである。シンガポールはこの料理を国家的に自慢しているが、それは本来は海南島のものである。移民たちが自分の料理をいかに用心深く、移民先の土地の味付けに合わせるようにして、適合させてゆくかが、ここでは語られている。

「ナシクニン」とは、インドネシアの黄色い米を示す言葉である。

「豚肉のディスクル」は、二〇〇二年に香港のスーパーマーケットが競争相手を潰し、市場を独占するため、豚肉の価格を引き下げた事件をもとに書かれた。

「湯豆腐」は、作者が翻訳者とともに香港銅鑼湾の日本料理店で食事をしたときの思い出に連なるものである。また「京漬物」では、日本の漬物の製法がSM遊戯の修辞法を用いて語られている。ちなみにここに訳出された作品のいくつかは、

二〇〇三年十一月八日、本研究所主催の第三回ポエトリー・リーディングにおいて、作者と翻訳者の手で朗読された。